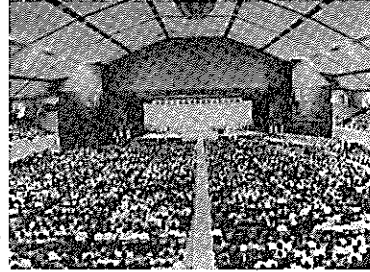


## 点描

## 北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No.13

1969  
昭和44年

教区を挙げて行われた開教百年記念式典 (中島スポーツセンター)

北海道開教百年  
一万人が結集した教区を挙げた事業

北海御廟において宗祖七百回御遠忌法要を終えた教区は、次に向かうべき課題を「現如上人遺徳顕彰」と「開教百年」に見定めた。

一九六九年(昭和44)、北海道教区は、この年を開教百年と位置づけて開教百年記念式典を挙行するとともに、記念事業を実施する計画を立案した。

道としては、一八六九年(明治2)に東京に開拓使を置いて函館に出張所を開き、「蝦夷地」から「北海道」に改称した年を百年の起点としたが、教区はその翌年を起点とした。この年は十九歳であった現如上人が北海道に渡って札幌別院を創立し、いわゆる「本願寺街道」を開いたとされる年である。

もちろん、これに先立つ江戸期の松前専念寺、さらには蓮如上人の弟子弘賢が一四九九年(明応8)に上ノ国に堂宇を建立したことに遡ることもできるが、近代における始まりと現如上人遺徳顕彰に重

きを置いたことが窺われる。教区は教区会の議決を経て、一九六九年(昭和44)七月に記念式典を行うことを決定した。

しかし、教区が百年とした一九六九年は、教団にとって極めて重要な年である。

この年、宗祖親鸞聖人御誕生八百年記念企画事業費を計上し、お待ち受けの第一歩が踏み出された。また、真宗同朋会運動も第二次五カ年計画に入り、真宗カリキユラム作成にも着手。真宗教団連合も結成され、まさに真宗教団がさらなる展開へと歩み出していく状況にあった。

その最中の四月に管長職を光紹新門に譲るとする「開申問題」が惹起。6月には部落解放同盟による難波別院輸番差別事件に対する糾弾会が始まり、靖国神社国家護持法案に対して東西両派による廃案要請が行われた。この三つの問題は、同年宗派の機関紙『真宗』に掲載されているが、教区の『北海真宗』にこの問題に対する取り組みは掲載されていない。

さて、開教百年法要は、教区と札幌別院の共催で札幌別院創立百年記念法要と兼修されるかたちで厳修されたが、これとは別に行われたのが「北海道開教百年記念式典」である。会場は札幌市中島スポーツセンターで、参加者一万人が一階と二階のすべてを埋め尽くした。

なお、式典に先立って真宗本廟(東本願寺)で聖火が灯された。そして、現如上人が辿られた道程を十一教区の青少年がリレーして中山峠まで運ばれていった。聖火が到着した中山峠では、現如上人銅像の前でキャンプを張る全国大谷学園生徒大会を開催。大会終了後には聖火が徒歩で会場に届けられ、御本尊に献灯された。

さまざまな記念事業が展開され、教区においては最大規模の人々が参画した記念行事であった。しかし、この時、全く触れられないことがなかったのが「アイヌ民族差別」であった。この問題が教区に生きる者の課題となるのは、教団問題の顕在化を待たなければならなかった。